



古典の日絵巻 第五巻
日々のなかの古典

紅葉の今宮神社と「玉の輿お守」



勧修寺の山門

第八号 平成28年11月1日 京都の「玉の輿」伝説

京都には二人の女性に関わる有名な「玉の輿」伝説がある。一人は徳川三代将軍家光の側室となり、徳松君（後の五代将軍綱吉）を生んだ「たまの局（つぼね）光子」で、家光の歿後に桂昌院と号した人である。桂昌院は公家の二条家に仕えていた本庄太郎兵衛宗正の継子で、実は京都堀川通西藪屋町の八百屋仁左衛門の娘であるという（『玉輿記』『徳川幕府家譜』など）。

桂昌院は、将軍の生母として元禄十五年には従一位まで昇りつめ、京都の多くの社寺の修復、西陣の振興、葵祭の復興などに力を注いだ。また、やすらい祭りで知られる今宮神社本殿前の燈籠に彫られている「常昴（州）笠間城主従四位下本庄因幡守藤原宗資（むねすけ）」とは、桂昌院の弟の名である。江戸へ移ってからも姉弟は大変仲が良かったらしく、『徳川實記（とくがわじつき）』には元禄五年十一月、家光とお玉の方が宗資邸を訪れ、宗資に常陸國笠間城を与えたと記されている。

もう一人は、南山階（みなみやましな）（現京都市山科区）の長官宮道弥益（みやじのいやます）の娘「列子（たまこ）」である。南山階に鷹狩に来ていた藤原高藤（ふじわらのたかふじ）は激しい雷雨に遭い、見知らぬ屋敷に走り込む。そこは弥益の屋敷で列子はその娘であった。列子の美しさに惹かれた高藤は、一夜を共にして再会を約束する。そして生まれたのが胤子（いんし）で、その後高藤に引き取られた胤子は宇多天皇の女御となり醍醐天皇を生む。山科の名刹、真言宗山階派大本山勧修寺（かじゅうじ）は、宮道弥益の屋敷を寺に改めたものである（『今昔物語』（巻第二十二））。ちなみに紫式部の父為時は、高藤と列子との間に生まれた三条右大臣定方の孫にあたる。

NPO法人京都観光文化を考える会・都草

特別顧問 坂本 孝志